



楓和へ

あなたが生まれて、二ヶ月が経ちました。この手紙を渡すころには、きっと楓和はいろんな経験をして、いろんなことを考えて、生きているのでしょう。楓和と過ごす毎日を、わたしも当たり前のように感じているかもしれません。

でも、今、わたしの腕の中で泣いておっぱいをほしがっている、小さくてかわいい楓和を見ていると、この温もりは奇跡だと思うのです。生まれてきてくれて、ありがとう。あなたの命が宿ったときのことを伝えたくて、こうして手紙を書くことにしました。

あなたのお父さんと結婚したのは、2018年2月。子どもがほしいと思っていたので、自然に授かれるように暮らしていました。

しかし、妊娠したいならば「今日あたりがよい」というタイミングがあります。それを気にすることが、わたしたちにとって少しずつストレスになりました。



子どもがほしいという気持ちはある。でも、夫婦ふたりの時間も大事にして、仲のよい関係で暮らしていきたい。ストレスを抱えてギクシャクしたくはない。言葉にはしなかったけれど、お父さんのそんな思いが雰囲気から伝わってきました。わたしも、そう思っていました。

それに、ふたりとも30歳を過ぎていました。子どもができやすい、できにくいなどの話も知識としてあったので、そもそもわたしたちは子どもを授かれる体なのだろうかという不安がありました。

「病院に行こうか」と言ってくれたのはお父さんでした。すでに病院を調べていたわたしは、「言ってくれた、よかった」と思いました。子どもを授かるためには何か行動に移さないといけないと、心のどこかで思っていました。お父さんも同じ気持ちでいてくれた。それがわかってほっとしたし、とてもうれしかったのを覚えています。